

2025(令和7)年度 地域連携交流サロン
地域連携のリアルとモヤモヤを語ろう！
～大学・企業・自治体の“お困りごと”から見える、次の一歩～
開催報告

日 時：2025(令和7)年12月15日(月)18:00～20:10
会 場：キャンパスポート大阪 ルームB(大阪市北区梅田1-2-2-400 大阪駅前第2ビル4階)
ゲストスピーカー：向田 明弘 氏(茨木市 市民文化部長 兼 共創推進課長)
上田 幸司 氏(明星金属工業株式会社 代表取締役社長)
司会・コーディネーター：久 隆浩 氏(大学コンソーシアム大阪 地域連携部会推進委員会 委員長、
近畿大学 名誉教授)
参加者数：計26名
＜内訳＞大学教職員：10 大学15名、自治体関係者：3市1府7名、企業・団体：3社3名、
その他：1団体1名(市民団体／ボランティアセンター)
企画・運営：大学コンソーシアム大阪 地域連携部会

1. 開催趣旨

大学、自治体、企業など、多様な立場の組織が協力し、地域の課題解決や人材育成に取り組む「地域連携」は、いまや大学教育や地域づくりに欠かせない取組となっており、その広がりはますます大きくなっている。一方、「連携の窓口がわからない」「思うように連携が進まない」「人事異動で関係が途切れる」など、現場の担当者ならではの悩みも少なくない。本サロンでは、地域連携に携わる大学・自治体・企業等の担当者が、立場を越えて“お困りごと”を持ち寄り、気軽に語り合うことで、共感や新たな気づきを得ながら、今後の連携をより効果的に進めるための手がかりや、新たなつながりを見出す機会とすることを目指すものである。

2. プログラム概要

はじめに久委員長より、「地域連携の推進にあたっては、『繋がること』が重要であると同時に課題でもある。本サロンは当初より、立場を超えて情報共有・意見交換する場として行ってきた。本日はお二人の話題提供者をお招きしているが、ただ話を聞くだけの「講演会」ではない。サロンの趣旨に鑑み、参加者各位にもぜひ積極的に情報提供、意見交換いただき、つながりを作る場としてほしい。」との開会挨拶があった。



久委員長

続けて、以下の話題提供があった。

■上田氏

現在、大阪府、大阪市、大分県、広島県のほか、地元である大東市で各方面と連携しながら様々な取り組みを行っているが、本日は大東市における「雇用と人材育成」という製造業に共通する事業課題解決に向けた取組事例を共有する。自社は大東商工会議所の会員であり、大東市、大東市教育委員会、大阪産業大学等とも繋がりがあがるが、これらの産官学連携の枠組みにおいて意識しているのは「幹をつくる」ということである。幹とは具体的には「大東市で生まれた人が大東市で安心して生を全うできる」というトータルビジョンであるが、このビジョンに沿って、企業同士、企業と教育分野(小中学校・高校・大学等)、企業と行政・公共施設等の連携を効果的に推進することができている。企業同士の取り組みとしては、合同入社式や各種研修、安全教育の実施等があり、教育分野とはIoT講座の実施やキャリア講座への登壇、企業研修の実施、職業体験や工場見学等において密に繋がっている。また、公営施設や体育館における体験コーナーや講座の実施、市民(親子)対象のオープンファクトリーや南海トラフに備えて連携して行う避難訓練や消防訓練、河内木綿の復興等、公に資する取り組みも複数行っている。これら



上田氏

すべては前述の幹から繋がったものであり、幹(トータルビジョン)は(単発ではなく)継続的な施策に向けて欠かせないものだと考えている。

■向田氏

2023年11月にオープンした茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」という「場」の立ち上げから関わり、「場」を開く社会実験として「場」を通じた連携に取り組み続けている。自身が感じる連携のポイントと仕掛けは「Craft(クラフト)＝空間やルールを完成形にせず余白(関わり代)を残すこと」、「Coordinator(コーディネーター)＝人と人、人と場、人と情報をつなぐハブ的な存在を登用すること」、「Commons(コモンズ)＝公共でも私有でもない“開かれた空間”であること」、「Communication(コミュニケーション)＝管理者と利用者がリスペクトしあえる信頼関係を築くこと」という4つの「C」に集約できると考えている。



向田氏

連携の最初のきっかけとして、自身はこれだと思う存在を「一本釣り」している。これによりスタートした取り組み自体が誘因となって次の連携を呼び、その取り組みが大きく成長することもよくある。なお、一定期間で終了する連携であったとしても、何らかのかたちで次に繋げるという意識も持っておきたい。また「課題を解決しなければ」と固く捉えすぎるより、プロセスを大切にしながら共創やチャレンジ、試行錯誤をも楽しむといった観点も大切ではないだろうか。

3. 意見交換、質疑応答

プログラム後半には参加者の自己紹介の後、久委員長の進行のもと、活発な質疑応答、意見交換が行われた。要旨は以下のとおり。

Q1: 様々な連携を行っている明星金属工業株式会社では、社内に専門部署があるのか。

A1: 専門部署はなく、自身の個人的な発想をもとに動いている。(上田氏)

Q2: 企業見学等の企画は平日に行っているのか。

A2: 学校向けは主に平日に授業の一環として行っている。一方、一般向けの企画は大東市の観光課と連携し、「遊び体験」として“じゃらん”のコンテンツとして有償で提供している。これが2025年11月から大東市のふるさと納税返礼品として認定された。自社のPRも兼ねつつ、税込で市に貢献できるようになることを目指している。さらに、その税込の一部を、企業に対しての継続的な予算に割いてほしいという要望も出している。(上田氏)

Q3: 連携にかかる業務に対し、社内ではどのように合意形成をはかっているのか。

A3: 連携は自社にメリットがあることが大前提だと考えている。従業員にもそれを示して意義があると思ってもらえることが大事だ。また、取り組みが採用に繋がる等の実績を示すことも理解を得る要素となっている。(上田氏)

Q4: 企業が行政とよりよい形で繋がるためには、何ができるだろうか。

A4: 企業が単独で動くのではなく、複数または業界ぐるみで意見調整のうえ働きかけることで説得力は増す。また、連携先の方向性等を調べ、それを学んだうえで先方にメリットのある提案をすることも大事であろう。(上田氏・久委員長)
市役所と大学との関係も同様だと考えている。(向田氏)

Q5: コーディネーターは重要とのことだが、どのような人材がふさわしいか。

A5: いずれの立場の人ともフラットに付き合える立ち位置の人、片方に染まりきっていない人が向いているように思う。そのような人を見つけるため、できるだけ様々な人と会うようにしている。(向田氏)
人のストックを持っておくことが大事だ。コーディネーターはいわばセールスマンであり、人柄やフットワークの軽さも必要だろう。(久委員長)

Q6: 行政は担当者の異動が頻繁で、担当者により熱意が異なる。担当者頼みではなく組織的に連携を継続するために工夫していることはあるか。

A6: 自身は長期かつ継続的な課題解決のため、地域で根付くオーナー企業経営者を引き込んでいる。また、行政の担当者が交代した際は直接足を運んで説明するなどのフォローしており、この人だという人物と出会った際は異動後も関係性をつなげている。(上田氏)

組織における熱意の維持は価値観の共有からだと考えている。また、取り組みそのものの価値を高めることも心掛けている。(向田氏)

首長については対立候補に変わることもあるので、一定の距離感を保つことも必要か。(久委員長)

Q7: “「場」を開く社会実験”との言葉があったが、どこまで開けようまくいくのだろうか。

A7: 開くことを試すことそのものが社会実験であり、そのために大事なものは「これは社会実験である」という強い宣言と合意形成である。やってみる中で見えてくるものがある。また、小さく試すことで次に繋げるという意識も大切だと思う。(向田氏)

実験はすべてが成功する訳ではない。茨木市ではそれが適切に共有されている。(久委員長)

Q8: 数々の取り組みが内部の人材育成にもたらすメリットにはどんなものがあるか。

A8: 社員が実務と関係のない人たちと接する中で、固着しがちな考え方が柔らかくなる効果があるように思う。またそれが仕事に対する着眼点の変化にも繋がっている。(上田氏)

行政の職員はすでに専門家であることから、成長という観点は違うかもしれないが、連携による経験値は貴重で、地域との合意形成スキルを磨くという観点でも重要だと思う。(向田氏)



会場の様子

最後に閉会挨拶として久委員長より「地域連携の推進にあたっては、“共感”がひとつのキーワードであろう。人と人の中に生じる“共感”をどのように育むかが重要であり、仕事人である前に人間同士であるという観点を忘れてはいけない。真心のある信頼関係を築いてこそ、連携は可能となるはずだ。また、もう一つのキーワードとして“教育・人材育成”を挙げたい。これは企業や学校に共通する重要なキーワードである。さらに、連携にあたり、最も避けるべきワードは“できません”である。この言葉を投げかけられると、意欲を削がれるだけでなく、二度と連携しようと思わなくなる。たとえ難しくても、方法を模索するなど、誠意ある姿勢や努力する姿を見せることで、良好な関係が構築されるはずである。」との言葉があった。

4. 参加者アンケート結果

別紙「参加者アンケート」のとおり

以上